

特集 学生・院生・若手研究者の 勉学・研究条件上の諸問題

『日本の科学者』編集委員会

現在、日本の若者は非常に厳しい環境に身を置いている。むろん、若者だけではない。新自由主義が社会全体を席卷する中で、高齢者や子育て世代をはじめ、いわゆる一流企業における過労死の多発などをも含めて、命を第一に尊ぶことの大切さが改めて確認されなければならない時代なのである。

本号の境論文や佐藤論文にも詳しいが、先進国の中でも非常に高い学費により、大学への進学を断念せざるを得ない者も少なくなく、進学した者も高額な学費の支払いに苦しむ。奨学金という名の「学生ローン」は若者が社会に出た瞬間から重い負担としてのしかかる。学費や生活費を稼ぐためにアルバイトを行えば、「ブラックバイト」として知られる法外な労働環境に置かれることも少なくない。

さらに、卒業後の就職先や生活はまったく保障されていない。若者の約3割は非正規社員であるし、正規社員として採用された者も長時間労働などの過酷な労働条件の下で働くことは珍しくない。

大学院生・若手教員もやはり劣悪な環境のもとにある。学部生と同じく高額な学費が重い負担となり、学年が上がるほど奨学金も十分に得られない。アルバイトによりやむを得ず研究時間を削る者も少なくない。さらに、成果主義の導入は非常に近眼的な研究でよしとする風潮を生み出し、基礎研究や文系科目の存在意義がますます軽視されている。

現在の日本では若者が安心して学び働く権利が明らかに侵害されている。若者の多くは将来に対して明るい希望を持つことができず

にいる。このことは近未来の日本社会を支える基盤を掘り崩すものでもある。問題の実態を正確に把握すると同時に、適切な政策対応を速やかに行うことが求められている。

本特集は、当事者である若者自身が、学生・院生・若手教員が直面する諸問題の現状に切り込むと同時に、現状を打開する方向をも探ることを目的としている。

境正俊氏の「危機に置かれる学生の経済実態—高い学費と学生の経済的支援」は、主に学費・奨学金の問題に着目し、現在の大学生・大学院生の実態と置かれている状況、2000年以降の奨学金に関する議論の変遷、そしてこれからの展望を模索している。

JSA 東京支部院生幹事会の「JSA 院生の運動とその意義」は、近年の JSA 院生の活動の紹介として、院生幹事会や夏の学校の取り組み、さまざまな企画や研究活動の具体的紹介である。

鈴木力氏の「学生の就職難と賃金問題—最低生活保障としての最低賃金 1500 円」は、就職難と言われる近年の学生の状況を統計的に把握し、注目されている最低賃金とその社会運動を取り上げている。

佐藤和弘氏の「若手研究者のライフコースの困難について—JSA の組織拡大の前提のために」は、若手研究者の成長過程における克服すべき課題と社会運動との関連を解明し、それがまた JSA の組織拡大にとっての前提として注視すべきことを説いている。

JSA や学術関係諸団体のみならず、国民の皆様にもお読み下さるよう期待したい。